

高砂 詞章

〔五段次第〕

ワキ・ワキツレ「**次第**」今をはじめの旅ごころも、

今をはじめの旅ごころも、**日も**ゆくすえぞひ

ワキ 「そもそもこれは九州肥後の國、阿蘇の宮

の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候ほどに、この春思ひ立ち都へのぼり候。又よき序(ついで)なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候」

ワキ・ワキツレ「**道行**」旅衣すえはるばるの都路を」

ワキツレ「末はるばるの都路を」

ワキ・ワキツレ「今日思いたつ浦の浪、ふな路のどけき春風の、**いくかきぬらん**あんとすえも、**いさ白雲**のはるばると、**さしも思ひし**播磨がた、高砂の浦につきにけり。高砂の浦につきにけり」

ワキ 「いそぎ候ほどにこれは早や。播州高砂の浦につきて候。人來つて松の謂を尋にようずるにて候」

〔真ノ一声〕

シテ・ツレ「高砂の、松の春風吹き暮れて、**尾の**

上の鐘も、ひびくなり」

ツレ 「**二ノ句**」**波は霞の磯**がくれ」

シテ・ツレ「音こそ汐の、みち干なれ。」

(サシ) 誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎこし世世は**白雪**の、**積り積り**て老の鶴の、ねぐらに残る有明の、春の霜夜の起き居にも松風をのみ聞きなれて、**心を友**とすがむしろの、思ひをのぶるばかりなり。

(下歌) おとずれは松に事とう浦風の、**落葉**ころもの**袖**そえて、木陰のちりを搔こうよ。木陰のちりを搔こうよ。

(上歌) 所は高砂の」

ツレ 「所は高砂の」

シテ・ツレ「尾の上の松も**年**ふりて、老いの波もよりくるや。木の下陰の**落ち葉**かくなるまで命ながらえて、なおいつまでか**生き**の松、それも久しき例かな。それも久しきためしかな」

ワキ 「いかにこれなる翁に尋ぬべき事の候」

シテ 「こなたの事にて候か。何事にて候ぞ」

ワキ 「この所において、高砂の松とはいずれの木を申し候ぞ」

シテ 「さん候高砂の松とは、とりわきこの松を申しならわし候」

ワキ 「さてさて高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住の江とは國をへだてたるに、何とて相生の松とは申すぞ」

シテ 「さん候**古今集の序**に、高砂住の江の松も相生の様に覚えとあり。尉はあの住吉の者にて候。姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申さ給え」

ワキ 「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國をへだてて住むというはいかなる事やらん」

ツレ 「うたての仰せ候や。山川萬里を隔つれど

も、互に通う心づかいの、**妹背の道**は遠からず」

シテ 「まず案じてもご覧よ」

シテ・ツレ「高砂住の江の、松は**非情**の者だにも、相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通いなれたる尉と姥は、松もるとともに、この年まで、**相生**の夫婦となるものを」

ワキ 「謂を聞けば面白や。さてさてさきに聞こえつる、相生の松の物語、所に聞きおく謂れはなきか」

シテ 「昔の人の申ししは、これは目出たき世の譬えなり」

ツレ 「高砂というは上代の、萬葉集のいにしえの儀」

シテ 「**住吉**と申すは今この御代に住み給う**延喜**のおん事」

ツレ 「**松とはつきぬ言の葉**の」

シテ 「さかえは古今のあい同じと」

シテ・ツレ 「み代を崇むる譬えなり」

ワキ 「よくよく聞けば有難や。今こそ不審はる**の日の**」

シテ・ツレ「**光**やわらく**西の海**の」

ワキ 「かしこは住の江」

シテ・ツレ「ここは高砂」

ワキ 「**松も色**そい」

シテ・ツレ「**春**も」

地謡 「**初同**」**四海波**静かにて、國も治まる時**つ風**。枝をならさぬ御代なれや。**あいに相生**の松こそ目出たかりけれ。げにやあおぎても、**こともおろか**やかかる世に、すめる民とて豊かなる、君の恵みは有難や。君の

恵みはありがたや」

ワキ 「なおなお高砂の松の目出たき謂れねんご
ろに申され候え」

シテ 「ねんごろに申し上ぎようずるにて候」

地謡 「(クリ) それ草木心なしとは申せども、
花實の時をたがえず、陽春の徳をそなえて
南枝花はじめてひらく」

シテ 「(サシ) しかれどもこの松は、その気色
とこしなえにして花葉時をわかず」

地謡 「四の時いたりても、一千年の色雪のうち
に深く、又は松花の色十かえりとも言え
り」

シテ 「かかるたよりを松がえの」

地謡 「言の葉草の露の玉、心をみかく種となり
て、生きとし生けるものごとに、敷島のか
げに、よるとかや。

(クセ) しかるに長能が言葉にも、有情非
情のその声、みな歌にもるる事なし。草木
土砂、風声水音まで萬物をこむる心あり。

はるの林の、東風に動き秋の虫の、北露に
なくもみな、和歌のすがたならずや。

中にもこの松は、萬木にすぐれて、**十八公**
のよそおい、千秋のみどりをなして、古今
の色をみず、始皇のおん爵に、あずかるほ
どの木なりとて、異國にも本朝にも萬民こ
れを賞翫す」

シテ 「高砂の尾の上の鐘の音すなり」

地謡 「暁かけて、霜はおけども松が枝の、葉色
はおなじふか緑、たちよる陰の朝夕に、か
けども落葉のつきせぬは、まことなり松の
葉のちりうせずして色はなお、**まさ木のか**
ずら永き代の、たとえなりけり常磐木の中
にも名は高砂の、**末代**のためしにも相生の

陰ぞひさしき。

(ロンギ) げに名にしおう松が枝の、げに
名にしおう松が枝の、**老木**の昔あらわして
その名を名のり給えや」

シテ・ツレ 「今は何をかつつむべき、これは高砂
住の江の、神ここに相生の夫婦と現じきた
りたり」

地謡 「不思議やさては名所の、松の**奇特**をあら
わして」

シテ・ツレ 「草木こころなけれども」

地謡 「かしこき世とて」

地謡 「わが大君の國なれば、いつまでも君が代
の、住吉にまずゆきてあれにて待ち申さん
と、**夕浪**のみぎわなるあまの小舟にうちの
りて、追い風にまかせつつ、沖のかたへい
でにけりや。沖のかたへ出でにけり」

中入
アイの居語り

ワキ・ワキツレ 「(待謡) 高砂やこの浦舟に帆を
あげて」

ワキツレ 「この浦舟に帆をあげて」

ワキ・ワキツレ 「**月もろともにいでしおの、浪の**
淡路の鳴かげや。**遠く鳴尾**の沖すぎて、早
や住の江につきにけり。早や住の江につき
にけり」

[出羽]

シテ 「われ見ても久しくなりぬ住吉の、**岸の姫**
松いく世経ぬらん、むつまじと君は知らず

や瑞がきの、久しき世世の神かぐら、夜の
つづみの拍子を揃えて、**すずしめ**給え、**宮**
づこたち」

地謡 「**西の海**、あおきがはらの波間より」

シテ 「あらわれいでし住の江の春なれや、残の
雪の**あさか**がた」

地謡 「**玉藻**かるなる岸陰の」

シテ 「**松根**によって腰をすれば」

地謡 「千年の緑、手にみでり」

シテ 「**梅花**を折って首にさせば」

地謡 「二月の雪、ころもに落つ」

[神舞]
「有難の**影向**や。有難の影向や。**月すみよ**
しの神あそび**みかげ**を拜む**あらた**さよ」

シテ 「(ギリ) げにさまざまの舞びめの、声も
すむなり住の江の、松かげもうつるなる、
青海波とはこれやらん」

地謡 「神と君との**道**すぐに、都の春にゆくべく
は」

シテ 「それぞ**還城**楽の舞」

地謡 「さて**萬才**の」

シテ 「**小忌**ころも」

地謡 「**指**すかいなには、あくまを拂い、**おさむ**
る手には**壽福**をいだき、**千秋**楽は民をなで、
万才楽には命をのぶ。相生のまつ風、**さつ**
さつの**声**ぞたのしむ。さつさつの**声**ぞ**楽**し
む」

※詞章は金春流謡本によるもので、上演に際し実
際のセリフとは一部異なる箇所があります。

脚注

日も…衣の縁で紐とし、日もと掛けた。

ひさしき…日数の多いことと、未久しいという祝言の意を込めた。

はるばる…衣の縁で張るとし、春風、播磨の音を導いた。思い立つは裁つに、きぬは着ぬ、浦は裏にそれぞれ衣の縁とし掛けた。

いくかきぬらん…幾日来ぬらん。続拾遺集に、「旅人の衣の関のはるばると都へだてて幾日来ぬらん」とある。

いさ白雲…いさ知らず、さあどうであろうかという意と掛けた。春風、白雲とのんびりとした船路を描く。

さしも思いし…あのように遠方だと思っていた。

尾上の鐘…千載集「高砂の尾上の鐘の音すなり 暁かけて霜や置くらん」によった。尾上は峰の上の意。クセの途中にも再び出てくる。

波は霞の…波は霞に隠れて見えないが、波音の遠近で潮の干満がわかるという意。

誰をかも…古今集「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」年をとり昔からの友は皆死んでしまい、あの高砂の松も自分より若く昔からの友ではなく誰一人昔馴染みがない。本当に寂しいことだ、という意。

白雪…知らぬと掛けた。

積り積りて…年の積ると雪を積るとを掛けた。

老の鶴…老いの身を鶴にたとえ、鳴く音とねぐらを掛けた。

心を友と…友とすと昔を掛け、筵の縁で延ぶるとした。延ぶるはのびのびさせる、くつろがせるの意。心を友とするとは、ここでは和歌を友とすること。

落葉ころも…落ち葉の散りかかった衣。次の袖につながる。風の落つと落ち葉を掛けた。

袖そえて…衣の袖を帯にそえて。

年ふりて…年月を重ねて。

落ち葉かく…落ち葉をかき集めると、斯く、このように年を重ねるまでというのを掛けた。

生きの松…福岡にある生きの松原を指す。神功皇后が三韓征伐の際、松の枝逆さに挿して戦勝を祈願をしたところ、その松が根付いたためこの名がついたとされる。いつまで生きながらえん、とこの地名を掛けた。

古今集の序…最初の勅撰和歌集。序文は紀貫之の作。

妹背の道…夫婦の仲。

非情…仏教で草木金石等は非情、人天鬼畜等は無情という。

相生…相老という意味も含んでいる。

住吉…住の江の異名。

延喜…醍醐天皇の御代の年号で、古今集の出来た時期。

松とはつきぬ言の葉の…古今集の序に「松の葉の散り失せずして」とあるのによつて、松の如く和歌の道も栄えてといった。

はるの日…不審が晴れると春を掛けた。

光やわらぐ…日をうけて日の光とし、和光同塵（仏や菩薩が本来の威光をやわらげて、ちに汚れたこの世に仮の身を現し、衆生を救うこと）という言葉に通わせて和らぐとした。

西の海…続古今集 卜部兼直の歌「西の海阿波伎の原の潮路より頭われ出でし住之江の神」から西の海と連ねた。なお「阿波伎」を「あおき」と読み、後場にもこの和歌は登場する。

色そい…色添ふ、色が濃くなる、つまり松葉の緑

が鮮やかに色づいていくという意。

四海波静か…天下泰平の意。後拾遺集序に「わが君天下しろしめしてよりこの方、四つの海波聞こえず」とある。四つの海は具体的な場所を指すのではなく、世界、世の中という意。

時つ風…潮の満ち来るときに吹く風。転じて時に適った順風。

枝をならさぬ…後漢の王充の著『論衡』の天下泰平を描いた文に「風不鳴條」とある。條は枝の意。

あいに相生の…御代に逢うと言いかけ、音を重ねて相生と連ねた。

こともおろかや…わざわざ言葉にするのも愚かなことである。言うまでもない。

南枝花はじめてひらく…和漢朗詠集「誰言春色 従東到、露暖南枝花始開」によった。花は梅を指す。

花葉時をわかず…他の木のように花が咲いたり、葉を落とすことなく、いつも葉を茂らせている。

四の時…四季。

一千年の色雪のうちに深く…和漢朗詠集による。深い雪の中でも千年変わらぬ緑を湛えている。

松花の色十かえり…和歌童蒙抄に「松花は千年に一度咲くなり」とあり、百年を十度繰り返すことを十廻（とかえり）という。

松がえ…待つと松が枝を掛けた。

言の葉草…和歌を指す。松の葉、葉草、草の露、露の玉と連ねて、玉を磨くを心を磨くに言いかけた。種も草の縁語。

生きとし生けるもの…古今集序に「花に鳴く鶯水にすむ蛙、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」とある。

敷島…和歌の道を指す。敷島は大和の国、日本

を意味する。日本古来の道、すなわち和歌の道となつた。

長能…藤原長能。歌人。ながよし、ながとうと読むが、謡の中では「ちようのう」と発音している。著作に「和歌はこれ五行の体なり。詞に出ずを歌とし、心に知れるを体とす。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の体に洩れず。有情非情ともに歌の道をばおこすなり」とあるのを引いた。

十八公のよそおい…十八公は松の字を解いたもの。謡の中では「しうはつこう」と発音する。よそおいは、ようす、威厳といった意。

まさ木のかずら…真折葛と書く。一般的には定家葛。先に挙げた古今集の序「松の葉の散り失せずして」の後、「真折の葛長く伝はり」と続く。色はなお増すにかけて、まさきとした。

末代…高砂の松と末代とを掛けた。「まんだい」と発音する。

老木…名にし負う(＝有名である)の負うの韻を踏み老木とし、老夫婦を老木に例えた。

奇特…奇跡。

土も木も…太平記「土も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき」という歌の上の句を引用した。

夕浪…言うと掛けた。

月もろともにいでおの…月が出るのと一緒に舟を漕ぎ出したということを出汐に掛けた。

浪の淡路の…波の泡と淡路を掛けて、淡く霞んで見えるという意味も含まれた。

遠く鳴尾の…遠くなると鳴尾を掛けた。鳴尾は武庫川の河口付近。

われ見ても…伊勢物語に「昔帝住吉に行幸し給いけり」と詞書して載せた歌。

むつましと…「御神現形し給いて」と詞書した右の返歌。下の句は「久しき世より祝いそめてき」。世から夜神楽に転じた。

すずしめ…祭事を行つて神の心を慰める。
宮づこ…宮に仕える人。神主。

西の海…前半の脚注参照。
あさかがた…雪の少なく浅いということと、浅香潟という住吉の海辺にある地名と掛けた。

玉藻かるなる…万葉集に「夕されば汐みちくなる住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな」。

松根に…和漢朗詠集の詩句「倚松根而摩腰、千年之翠滿手、折梅花而挿頭、二月之雪落衣」を引用した。腰を摩るはさすること。二月の雪は落花のたとえ。二月は「じげん」と発音する。

影向…ようごう。神霊が姿を現すこと。
月すみよし…月が澄むと住吉を掛けた。

みかけ…御影。影は姿の意。
あらた…神仏の靈験が著しいようす。あらたか。

すむなり…声が澄むの音から住之江と連ね、住之江の松と続けた。

青海波…せいがいは。盤渉調(高い調子で水にちなむ)の舞楽。その装束は舞楽中最も華美なもので、源氏物語紅葉の賀巻では光源氏と頭中将が相舞した。青々とした松の姿が海の波に映るさまは、まさに青海波といえようか、という意。

道すぐに…神慮に適った君の政道の如く真っ直ぐにということと、真っ直ぐに都への道を行くということとを掛けた。

還城築…げんじょうらく。舞楽の名前。都へ還るという意味でこの舞楽の名を出した。

萬才…ばんぜい。めでたいという意。

小忌ころも…白布青摺の狩衣風の上位で、大嘗祭豊明節会などに祭官または舞人が着す。白布とあるが、能では紺地の物が多く使われる。

指すかいな…指す腕。両手を前にさし出す舞の型。

おさむる手…両手を体に引き寄せる舞の型。

千秋楽…盤渉調の楽曲で、後三条天皇の大嘗会に源頼能がつくった。この曲には舞はない。一日の終わりに演奏されるので、俗に最後のことを千秋楽といい、能会の最後でもこの部分が謡われることが多い。なお謡の中では「せんしゅうらく」と発音する。

万才楽…舞楽の曲名。千に対して万との対比となつている。則天武后の飼つていたオウムが、常に万歳と鳴くのを喜んで作つた曲であると伝えられる。即位の大典にも演奏される目出度い曲。

さつさつの声…颯々の声。松風の音と舞の袖の翻る音。さつさつは「さーさん」と発音する。